

バリアフリー 街変える

つながる
空の下

2020
東京パラリンピック
第7部 下

1万8000円の劇団四季の「ライオンキング」のチケット50席分が、ネット販売開始1分で売り切れた。セリフが字幕で見られる端末を貸し出す11月の特別公演。「演劇を鑑賞したい聴覚障害者がたくさんいることと表れ」。特別公演を企画したNPO「シアター・アクセシビリティ・ネットワーク」の広川麻子理事長は言う。

演劇や演奏会で字幕や音声ガイド、バリアフリーなどのサポートがあるかどうかの情報を提供するサイト「TAInet」を運営する。立ち上げたのは、東京パラリンピック開催が決まった翌年の2014年7月。当初は広川さんが情報を集めていたが、最近は劇場側からの掲載依頼が増えたという。視覚障害者向けの触れる舞台模型、耳が不

トイレ案内・紹介サイト…サポート多様化

自由な人向けの台本の貸し出しなどサポートも多様化してきている。

3年後、日本にはさまざまな人が訪れる。生まれつき耳が聞こえない広川さんは「誰もが楽しむためにはどうしたらいいか、見せる側の意識が変われば、会場も街もきっと変わっていくはず」と期待する。

日本のホテルのバリアフリー設備などを紹介する英語サイト「アクセシブルジャパン」を開設したグリスデイル・バリージョシュアさん(36)は「バリアフリーツアー」の監修にも携わる。東京・浅草のツアー開発では、浅草文化観光センターにある多目的トイレを推奨。場所によっては「英語の案内がないのは残念」とも指摘した。

バリアフリーツアーを販売する旅行会社「トリップデザイナー」の坂元社長(35)は「助言で動線やトイレの使い方がスムーズになり、満足度は高まった」。20年に向け、現在は月1件のツアー販売を50〜100件に増やしたいという。



グリスデイル・バリージョシュアさん(右から3人目)が監修したバリアフリーツアー＝東京都台東区

観光業界は「道半ば」

東京都は、20年に2500万人の外国人観光客の訪問を目指す。一方、ホテルなど観光業界のバリアフリーはなかなか進んでいない。都は、宿泊施設が手すりを付けたり段差をなくしたりする改修のための補助金制度を設けるが、都産業労働局によると、パラリンピック開催が決まった後も制度の利用は毎年十数件で横ばいのままだ。

昨年からは開催する「東京の観光振興を考える有識者会議」では、パラリンピック出場経験のある車いすの選手から「バリアフリーの客室でも、タオルが手の届かない高さに置かれていた」と、設備だけではない「心のバリアフリー」も求められた。浦崎秀行・観光振興担当部長は「バリアフリーの整備は多様な客を受け入れ、利益にもつながる。障害者や高齢者が安心して楽しめる環境整備の価値を伝えたい」と話す。

(斎藤寛子、野村周平)